

前回までのあらすじ

流遠るとおやみひめは地元の小学校に通う、普通の小学六年生の女の子。

今年の夏、ひよんな事から知り合った高校生・橘たちばなアサトに片想い中。

謎の少女・ツバキと出会い、彼女を救うために、やみひめは〈機獣少女きじゅう〉となった。

危機を脱したものの、事態は収拾していない。そこで、やみひめはツバキに協力を申し出る。

慌ただしかった週末が終わり、新たな一週間が始まった。三日ぶりの登校はひどく新鮮で、友人のクラウと過ごす普通の学校生活が、やみひめにはとてもかけがえのないものを感じられた。

平穏な日々の大切さ。

〈機獣少女〉として戦う意味。

そして、護りたいもの。

やみひめは、それらを改めて認識するのだった。

機獣少女ゾイカルやみひめ **The NOVEL XXXXXXX**

小学生の下校時刻。秋とはいえ、夕方と呼ぶにはまだ明るい時間帯。

通学路を、自宅へ向かい並んで歩く少女達がいた。

一人は長い黒髪をポニーテールにした快活そうな少女。琥珀アンバーのような、少し吊り目がちなたいだい橙色の瞳が特徴的だ。多分に幼さを残した顔つきと小柄なたいく体躯。私服と背中のランドセルから、小学校の高学年くらいに見える。

るしお流遠やみひめ。

二日前、ひよんな事から「機獣少女」という戦う力を持ったしまった小学六年生である。やみひめと並んでいるのは、明らかに彼女より歳上であろう少女だ。長い黒髪は絹糸のように背中を流れ、前髪の一部には白いメッシュが入っている。真紅の瞳、大人びた表情と相まって、パンクバンドのボーカリストでもやっていそうな雰囲気がある。背は高く、スタイルも良い。

だが、彼女の背中に見えるのは間違いなくランドセル……。

クラウ・P・ブラン。

ぱつと見は高校生にしか見えない容姿だが、れっき歴とした小学生である。

どう見ても『高校生の姉と小学生の妹』だが、仲良さ気に会話をしながら歩く二人はクラスメイトにして親友という間柄で、つまりおな同い歳だ。成長の個人差が激しい歳頃とはいえ、クラウの早熟ぶりは目をみは瞠るものがある。

それだけに、彼女のランドセル姿は少し痛々しいものがあるが、そこはかとな背徳感も醸し出している。

「——ッ!？」

「どうしたの、くららっ!？」

急にびくりと身を震わせた友人に、やみひめはきよんとした顔でたず訊ねた。

「……判らないけど、変な悪寒がした」

「え、大丈夫？ 風邪かな。季節の変わり目だし……」

もうすぐ九月も終わりである。半袖の生徒も見かけるが、多くは薄手の長袖を着用している。日によっては急に冷え込んだりして、体調を崩す者も珍しくない季節だ。

もつとも、クラウの感じた悪寒はそういったものとは別種だったが……。

「ありがとう。でも大丈夫」

「そう?」

「うん。きつと、気のせいだよ」

「くらうは美人さんだから、誰かに噂されてるのかも」

クラウの表情が、友人を心配させまいと気丈に振る舞っているように見えた。だから、

やみひめは励ます意味を込めて言ったのだが、クラウは微妙に困った顔をした。

「あ……」

それを見て、やみひめは『しまった』という顔をした。クラウは自分の容姿にコンプレックスを持っている。小学生には見えない高身長と雰囲気で、周囲から敬遠されていた時期があるからだ。

「そんな顔しないで。やみひめが本心で言ってくれてるのは判ってるから」

微苦笑を浮かべるクラウ。その表情もまた大人びており、小学生の少女にしては達観しているように見える。

「自分でも判ってるの。もっと自信を持って堂々とすればいいって。けど、私は普通がよかった。普通に、ゆつくり大きくなりたかった。可愛い服も着てみたかったし」

クラウの身長や容姿だと、シックだったりカジジュアルなファッションが似合う半面、可愛い系のコーディネートは難しいのだろう。やみひめからすれば大人っぽい服装に憧れるので、クラウのビジュアルは羨ましくはあっても、コンプレックスに感じる気持ちは正直、理解出来ない。^{でき}

だが、こればかりは仕方がない。人間は自分の尺度でしか物事を量れない。自分の価値観で見られない。どんなに相手の立場に立って考えても、それは想像でしかなく、決定的なところで理解はしきれない。

だが、それでも――

「私はくらうじゃないから、くらうの気持ちは判らないかもしれない。でも、くらうが美人さんで、羨ましいなって思うのは本当だよ。だから、えっと……」

理解出来ないからと、あきらめていいとは思わない。判ってもらえないとしても、自分の気持ちを伝える努力を放棄していい理由にはならないから。

「そのままでもいいと思うよ。可愛い服も着ればいいよ。探せば、似合うのがあると思うし……そうだ、一緒に見に行こう！ 私が可愛いの選ぶから！ ね！」

と、やみひめは思った事をそのまま言葉にした。思いついた事を、思いついた順に、思ったままに。それがいいと思ったし、それしか方法が浮かばなかったから。

「……やみひめはすごいね。私は、そんな風に自分の気持ちが言えない。嫌われたり、笑われたりするのが怖いから」

「私、これしか出来ないもん」

困ったような微笑を浮かべるクラウに、やみひめは不安げな顔で答えた。自分の言葉をクラウがどう思っているか、まだ判らないから。

「……無神経な事言っただら、ごめんね。でも、私は本当にそう思うよっ。」

上目遣いでクラウの表情を窺うやみひめ。クラウの背が高いからというのもあるが、それは面と向かって直視する自信のなさの表れでもあった。こちらがどんな気持ちであっても、どう受け取るかは相手次第だから。良かれと思って言った事が、相手の逆鱗に触れる事もある。

しかし――

「ありがとう。無神経なんかじゃないよ。そんな風に言ってもらえて、すごく嬉しい」
クラウは好意的に受け取ってくれたようだ。優しい表情で、心からの笑顔をやみひめに向けている。

「でも、やっぱり私は、やみひめが羨ましい。やみひめみたいに可愛い方が良いよ」
「私はくらうみたいな美人さんの方が良いと思うんだけどな」

互いに相手の方が良いと言い合っているうちに、段々と褒め合っているようで気恥かしくなり、しばし無言になる。そして、どちらからともなく、自然と笑みがこぼれた。人は自分がないものに憧れる。

そして、自分の持っているものの価値には気付きにくい。

隣の芝は青く見える。

要はそういう事だ。

「ねえ、本当に服見に行こうよ。最近、くらうと一緒に買い物とか行ってないし」

「そうだね。冬用に一着分くらいなら、お小遣いもらえるかもしれない」

「私もお母さんに頼んでみる。一緒に買いに行つて、くらうが選んで？」

「判った。可愛いを選んであげる」

「えー。私、大人っぽいのがいいんだけど」

「駄目。私が着られないから、代わりにやみひめに可愛いのを着てもらおう」

「くらうが着なよ。可愛いのも似合うよ」

「本当……?」

「うん！ 本当！ だから、ね？」

「……………うん」

大人びた顔に、はにかんだ年齢相応の少女の表情を浮かべた友人を見て、やみひめは掛
け値なしに可愛らしいと思った。きっと可愛い服も似合うとも。

第七話

『機獣少女と明日の予定』

くらうと別れて、いつも通りに公園に着いた。

アサトと出逢うきつかけになった場所。

アサトと再会した場所。

そして、アサトと逢瀬おうせを続けている場所。

私にとって特別な場所で、三日前の事件に遭遇したのも——ここだった。

ツバキと出会って、〈カタストロ〉に襲われて。

〈カグツチ〉と契約を結んで、私は〈機獣少女〉になった。

あの日、もっと早く家に帰っていたら、こんな事にはならなかったかもしれない。

〈カタストロ〉の事なんて知らず、〈機獣少女〉にもならず、いつも通り、穏やかな日常を送っていたかもしれない。

だけど、私は知ってしまった。訳も判らず地球に来てしまっただけで、誰も頼れず、たった独りで戦わなければいけない女の子を。

ただの小学生の私に、見ず知らずの女の子を助ける義務なんてない。

でも、私はツバキを知ってしまった。強くて、優しく、悲しい女の子を。

放っておけない。そんな事したら、私はこれからずっと罪悪感を抱えて生きていかなきゃならなくなる。嫌悪感で、自分を一生許せなくなる。

だから、自分の選択に後悔はない。

これから後悔する事になったとしても、それでもいい。

やらずに後悔するよりは、やって後悔する方がいいと思うから。

公園に入り、そんな事を思いながらしばらく進む。

「——あ。アサト！」

いた。いつものベンチで、待ち合わせの相手は何をするでもなく、ぼーっとして——なかつた。

「……寝てる？」

ベンチに座っている、高校の制服を着た男の子——私の待ち合わせ相手は、両目を閉じて、腕を組んで、静かに寝息を立てていた。

たちはな
橘 アサト。

高校三年生。少し長めの黒髪以外は、特に特徴らしい特徴はない。普段からローテンションで、面倒くさそうな雰囲気漂わせていて、口調も気怠けだるい。私の話には気のない返事をして、口を開けば意地悪や皮肉ばかり。

……私、なんでこんなのが好きなんだろう。

冷静に考えると、アサトはダメ人間で、好きになる要素なんて何もない。痴漢から助け

でもらったけど、それだけだったら、ただの『吊り橋効果』だし。

だけど、私はアサトが気になって仕方ない。それが『恋』なんだって、すぐに気付いた。出会ってまだ二ヶ月も経ってないけど、時間が経つほど、逢えば逢うほど、好きな気持ちが大きくなる。私の気持ちの器はもう一杯で、いつ『好き』が溢れてもおかしくない。

「ん……」

起こすのも悪い気がして、アサトの隣に座って寝顔を眺めていたら、アサトが少し身動きみじろした。なんか、可愛い。今なら、ちよつとやそつとじゃ起きないかもしれない。

そう思うと、急にいたずら心が芽生えてくる。

「……えい」

少しだけ空けていた距離をなくし、ぴたつと寄り添ってみた。服越しだけど、アサトの体温が伝わる気がする。

……これは思ったよりドキドキする。

うん。もう、いたずらとかいいや。せっかくだし、今日はこのままアサトと一緒にお昼寝するのもいいかも。

もう秋だけど、陽射しひざが暖かくて気持ち良い。隣にアサトがいる安心感もあって、私はすぐに微睡眠ましろに落ちてしまった。



ほんのりと温かい感触がする。誰かに手で触れられているみたいな優しい温もり。

誰だろう？ すぐく落ち着く。

もつと触れてほしい。

「——おい、やみ子」

知ってる声が私を呼んでる。アサトの声だ。

また『やみ子』って言う。私の名前は『やみひめ』なのに。

「起きろ。起きないと——」

なんだろう。顔の左右をつままれて、ゆっくりと引っ張られる感覚。

「ん………い……い……で……で……で……ッ!？」

「起きたか？」

頬ほおに走った痛みで目を開けると、間近にアサトの顔があった。『しようがねえな、こいッ』みたいな顔で私を見る。そうか、私、本当に眠っちゃってたんだ。

「う………おはよう、アサト」

頬を擦りながら、恨めしい視線を送るけど、アサトは悪びれた様子もない。

「もう。顔が変になっちゃったらどうするの？ そしたら……せ、責任とってくれる？」

言ってる途中で、ちよっと恥ずかしくなっていました。ちらっとアサトの顔を見上げると、すこくジトツとした目をしていて。呆れられてるみたい。

「お前な、こんなところで眠って、何かあったらどうするんだ？ 痛い目に遭った事があるだろうに」

アサトは少しだけ真面目な顔をして言った。私の事を心配してくれてるんだと思う。私がかここで痴漢に遭った事も知ってるし、助けてくれたのもアサトだから。

「……うん。ごめんなさい」

確かに、学習能力がないって言われても仕方ない。でも私だって馬鹿じゃない。

「でも、アサトが隣にいてくれるから……」

「俺がへっぴこな事は知ってるだろ？ お前を助けたのは警官だ。俺は一方的にやられていただけだ」

アサトが言うように、痴漢を取り押さえたのはお巡りさん達。でも、通報してくれたのはアサトだし、アサトが飛び出してくれなかったから、もっとひどい事をされてたかもしれない。それを考えると、すこく怖くなる。

「だいたい……俺に何かされるとは思わないのか？ 俺だって一応、男だぞ。お前みたいな子供に欲情はしないけどな、魔が差す事だってあるかもしれない」

怖い事を考えてしまって、私の表情が曇ったからか、アサトは少しだけおどけた口調で、そんな事を言った。

私はその言葉にきよんとした顔をしてしまう。

「——アサトだったら、されてもいいよ？」

もちろん、眠っている間にとかは嫌な気もするけど、アサトだったら、そこまで嫌じゃないというか。寝顔にキスされるとか、ちよっとだけ憧れたりもしたりして……あ、ちよっと恥ずかしくなってきた。

どうしよう、アサトの方を向けない。

どんな顔してるかな？ また呆れられてるかな？

「……アサト？」

ちらとアサトの顔を盗み見る。

すると——

「——なら、してやろうか?」

すごく真剣な顔をして、アサトはそう言った。

「<……?」

え? アサト、今なんて……?

アサトがずいっと距離を詰めてくる。元々、ベンチの隣に座っていたけど、今はアサトの顔が間近にある。息がかかりそうなくらい近い。

「ふえっ!」

びっくりして、思わず顔をそらしてしまった。でも、頬ほおに手を添えられて、アサトの方を向かされてしまう。アサトはまっすぐに私を見つめていて、黒い瞳に映った私の顔が見えるくらいの距離。アサトの瞳に映った私は、面白いくらい動転している。

「どうした? 何されてもいいんだろ?」

アサトの声のトーンが普段より低い。まるで金縛りの呪文みたいに聴こえて、動けなくなる。

アサトの顔がゆっくり近づく。

このまま、本当にキスされちゃうの……?

恥ずかしさとドキドキで頭がパンクしそうになって、私は思わず目を閉じてしまう。

そのまま、私はされるがままの状態で待つ。時間の感覚が麻痺しているのか、どれくらい、そうしていたか判らないけど、いつまで経っても唇に訪れるであろう感触はこない。

「……………?」

恐る恐るまぢた 瞼を開けてみる。

すると、元々いた位置まで戻ったアサトが、意地の悪い顔をして私を見ていた。

「——本当に何かされると思ったのか?」

「……………!?!」

そこで私は、アサトにからかわれた事によりやく気付いた。

「何をされると思ったんだ? ん?」

「もう! アサトの馬鹿あああああああああああああああああああああッ!」
アサトの馬鹿にした顔と、ちよっただけ期待してしまった自分に腹が立って、私は叫ばずにはいられなかった。



「最低！ 私の純情な乙女心を弄んだ！ ダメ人間！ スケコマシ！」

公園を出て、自宅に向かいながら、私はアサトに悪態を吐き続けていた。アサトの家は逆方向だから、普段は公園で別れるけど、今日は家まで送ってくれている。そうしないと私の機嫌が直らないと言ったからだけど。

「スケコマシで……口に出して言う奴を見たのは初めてだ」

「なに？ 文句あるの？」

私が睨むと、アサトは口にチャックを閉めるようなジェスチャーをして黙った。表現やリアクションが古いのはお互い様だと思う。

少し無言のまま歩くと、公園から私の家までは近いから、すぐに到着してしまう。

そこで、玄関に立っている小柄な女の子の姿に気付いた。セミロングの黒い髪を、左側でサイドポニーにしている。瞳の色は青く、表情と同じで、穏やかな色を湛えている。ツバキだ。

フルネームはツバキ・タカチホ。ここでは高千穂ツバキという事になってる。

私より一つ歳下の小学五年生で、身長は同じくらい。けど、胸は大きくて、本人はそれがコンプレックスみたい。

「——あ。おかえりなさい、やみひめさん」

私に気付いたツバキが出迎えてくれる。

「ただいま、ツバキ。待っててくれたの？」

「私も少し前に帰ったんです。ちょうど、やみひめさんが帰ると言っていた時間だったので、待っていきましょうか」

「そっか。ありがとう」

微笑を浮かべて言ってくれたツバキのおかげで、アサトのせいで荒んでしまった心が浄化された気がした。

「橘さんも一緒だったんですね。昨日はありがとうございました」

アサトにも私と同じように微笑を向けて、昨日の買い物指してお礼を言った。ツバキは本当に礼儀正しくて律儀だと思う。

「いや、大した事はして——」

「そうだよ。こんなダメ人間にお礼なんてもったいないよ」

アサトの言葉を遮って、私は刺々しい口調で言った。

「？ やみひめさん、どうかしたんですか？」

ツバキが不思議そうな顔をする。私が、ついさっきアサトに辱めを受けたなんて、

想像もしてないんだろう。

「駄目だよ、ツバキ。アサトに近付くと変な事されちゃうよ?」

「変な事、ですか……?」

ツバキがほんの少しだけアサトを警戒するような目で見た。

「……おい、やみ子。俺は何もしないっていうのを証明したんだぞ」

さすがに、事情を知らないツバキから不審な目で見られたのはショックだったのか、今度はアサトが恨みがましい目で私を見た。

それって、ツバキには誤解されたくないって事? なんか嫌だ。

「ふん! 知らない! じゃあね!」

私は吐き捨てるように言って、アサトの顔も見ずに家に入った。

……ちよつと言い過ぎたかな。

軽い自己嫌悪を感じていると、ツバキが遅れて現れた。ちよつと時間があつたけど、アサトと話してたのかな。

「たちほな橘さんから聞きましたよ? 危うく要らぬ誤解をしてしまうところでした」

きつと、公園であつた事をおおまかに聞いたんだと思う。そんなに時間は経ってないから、要点だけだろうけど。

「橘さんは、やみひめさんを心配しているだけで、意地悪をしたかった訳ではないと思います」

「……うん。判ってる」

私だつて判ってる。ただ、キスされちゃうかもって期待した自分が恥ずかしくて、怒つて見せてたのも、本当はただの照れ隠し。

「……アサト、怒ってた?」

「いいえ。むしろ謝っていましたよ? 『悪かったなと伝えてくれ』——と」

「……そっか」

「はい」

冷静になると、子供扱いされても仕方ないって思えてくる。ツバキは判ってるのに、私はアサトの事になると冷静でいられなくなる。

「明日、アサトに謝らないとね」

「そうですね。伝えたい事は、伝えられるうちに。でないと、伝えられなかった時に、きつと後悔する事になりますから」

ツバキは何でもない口調で言ったけど、そこには、すごく実感が込められていたように思えた。

ツバキには、私と同年代の女の子とは思えないと感じる時がある。それが〈機獣少女〉としての経験によるものなのか、ツバキ自身の生い立ちや価値観によるものなのかは判らない。

どんな生活を送ってきたんだろう？

どうして〈機獣少女〉になったんだろう？

私は、惑星ゼヘナでのツバキの事を何も知らない。

「……あの、やみひめさん？」

私が黙り込んでしまったのを、アサトとの件を気にしていると思ったのか、ツバキが気遣うような表情で私を見ていた。

本当に優しい子。自分の境遇だって、きっと不安なはずなのに。

あんな事で一喜一憂してられる私は、すごくお気楽なんだと思う。これがこの国の普通で、知りもしないゼヘナで育ったツバキと比べても仕方ないけど、今は私がしっかりして、少しでもツバキの不安や負担を減らしてあげたい。だから、ツバキに心配かけちゃ駄目だよ。

「私の部屋に行こ！ まだ夕食まで時間あるし、今日あった事、教えて！」

私は気持ちを切り替えて、明るく言った。ちよつと不自然だったかもしれない。空元氣に見えたかもしれない。

でも、それでもいい。

ツバキが笑ってくれたから。



私の部屋に移動して、荷物を置いたりして一息吐く。テーブルの上には、湯気を立てたティーカップが二つ。夕食前だからお菓子は控えめだけど、温かいアップルティーを口に含むと幸せな甘味が広がる。

「それでは、今後の方針について話し合いたいと思います」

少しまつたりしてから、ツバキがいつもの澄まし顔で切り出した。

昨日の夜に、ツバキとは今日の予定を決めておいた。逃げた〈カタストロ〉を闇雲に探すのは不毛らしく、まずはこの国の情報が欲しいというツバキに、私は図書館を勧めた。それで今日、私が学校に行っている間、ツバキは近所の市立図書館に行っていたのだ。

「迷わないで行けた？」

入り組んだ場所にある訳じゃないけど、土地勘がないツバキだと、少し心配になる。

「はい。優秀なナビがいてくれますから」

ツバキが、テーブル上の写真立てにネックレスのように掛けられた黒い勾玉まがたま——（機獣少女）の魔法の杖であるMBデバイス（カグツチ）に視線を向けた。ちなみに、今は待機状態。

「MBデバイスって、そんな機能もあるの？」

『映像・音声などの記録、計算や通信、他にもちよつとしたパソコン並みの機能は一通りある。この国のデータがないため、現在地確認や地図機能は使えんがな。それでも、昨夜に見せてもらった地図を参照すれば、迷う事はない』

（カグツチ）は少しだけ得意げに言った。地図があれば迷わないっていうのは、当たり前のようにでいて、実はすごい事だと思ふ。私も地図を読むのが苦手な方だから。

「私は方向音痴なので、（カグツチ）には普段から助けられているんです」

ツバキが少し照れくさそうに言う。

「そうなの？ ちよつと意外……」

『いや、ツバキの方向音痴は相当ひどいぞ。下手をすれば、目的地とは惑星の反対側に行きかねん』

そう語る機械音声マシン・ヴォイスには茶化ちやするような感じはなく、本気で危機感を感じているような声こわねに聴こえる。

「残念ですが、大袈裟な表現とは言い切れないところがあります。初めて行く場所では必ず迷いますし、勘で進むと、まず思った場所には出られません」

すでに開き直ってしまっているのか、ツバキの言葉には清々しさすら感じられる。それだけ（カグツチ）に全幅の信頼を寄せているのかもしれない。（カグツチ）の方もあきらめてしまっているのか、普段は割りと饒舌じょうぜつな印象なのに、この話題には積極的に参加してこない。本気で心配してしまうレベルの方向音痴なのかもしれない。

「まあ、私の方向音痴についてはこのくらいにして——図書館での時間はとても有意義でした。この国についても調べましたが、驚くほどに東方大陸——私の生まれ育った国と文化が似通っています」

ツバキの容姿や名前の響きから、日本人っぽいなどは思っていた。言葉も通じるし、日本語の読み書きも完璧。ゼヘナの人間は地球人との混血らしいから、『東方大陸』っていうのが、日本の文化的影響を受けていてもおかしくない。

『高千穂』という場所も調べてみました。この国の神話にまつわる土地なんですな」

「うん。『古事記』だっけ？ 『八岐大蛇』や『因幡の白兔』とか、私は有名なエピソードしか知らないけど」

『カグツチ』というのも、『古事記』に登場する神様の名前なんですよ」

「へえ、そうなんだ」

『そのようだな』

楽しみに図書館で得た話を話すツバキ。これまで、そういう場所に足を運ぶ機会があまりなかったのかな。もしくは、ゼヘナとの違いが単純に目新しかったのかもしれない。

「ツバキ、楽しそう」

「はい、とても。……不謹慎かもしれませんが、〈機獣少女〉になれない事で、緊張感が解けているのかもしれない。きっと、無意識にプレッシャーのようなものを感じていたのでしょう」

何気なく言ってみただけなだけで、ツバキには思うところがあつたらしい。〈機獣少女〉の仕事はツバキにとつて日常だったけど、こうして離れる事で、気付く事があるみたい。

「……私もね、今日学校きょうに行つて、すごく嬉しかった。当たり前前に毎日通かよつてたけど、それがすごく、幸せな事だったんだなって気付いた」

人間は当たり前前の事に感謝しない。

当たり前だから、当たり前じゃなくなるまで、当たり前の大切さに気付かない。

「友達と会つて、いつもの公園でアサトと逢あつて、それがすごく嬉しかった。ツバキが戦つてる理由も、そういうものを護りたいからなんじゃないかって、勝手に想像したりして」

「それは……」

「うん、判つてる。そんな立派な理由じゃないんだよね。でも、そういう気持ちも、きっとあると思うんだ。だから、私は勝手にそう思うよ。皆の平穩のために戦うつて、ヒーローみたいで格好良いし」

「……それでいいんでしょうか？」

「いいと思うよ。ツバキもそういう気持ちで戦つてれば、いつか本当になるかもしれない。このために戦つてたんだつて、思える時がくるかもしれない」

つき続けた嘘が本当になる事がある。最初はそんなつもりがなくても、いつのまにか好きになつて、夢中になつていたりする事がある。

「少なくとも、私を助けてくれた時のツバキは——ヒーローだったよ」

「……」

私がそう言うと、ツバキは下を向いてしまった。「どうしたの？」と、覗のぞきこもうとしたら、今度は逃げるように後ろを向かれました。その瞬間、ちよつとだけ見えたツバキの顔は、少し赤くなつていた。どうしたんだろう？

『くくっ。今はそっとしておいてやれ』

〈カグツチ〉が笑いをこらえるような口調で言った。ますます判らない。

『やみひめ、其方はなかなか罪作りだな。たった数日で、ツバキの表情をこれだけ引き出した者はそういないぞ』

「え、そう……？」

確かに、困らせたり泣かせたりしたけど……。

『自覚なしというのが、またなんとも。〈機獣少女〉の間では〈難攻不落のツバキ〉という二つ名で呼ばれておるくらいだぞ？』

「なにそれ!!? 格好良い!」

『〈カラストロ〉との戦闘で一度も負傷した事がないという意味もあるが、実際にはもう一つの意味が大きい』

〈カグツチ〉はもったいつけるように間を置く。

『それはな、ツバキの澄まし顔を崩せる者がいないという意味だ。どんな話題を振ろうと、涼しい顔で受け流してしまうのだ。何の悪意もなくな』

確かにツバキはいつも澄まし顔で、それが少しも嫌味じゃないけど、その子供らしくない表情を崩してみたいと思うのかもしれない。

「そっか。ツバキって、ゼーナではこんな感じじゃないんだね」

『うむ。だから私も、ここ数日のツバキを見ていて驚きを禁じ得な——』

「〈カグツチ〉、もうそのくらいで結構です」

ツバキが〈カグツチ〉の言葉を途中で遮った。もう普段の澄まし顔に戻ってるけど、まだ少しだけ表情がぎこちない気もする。

「まったく……やみひめさんは悪女の才能がありますね。私が男性であれば、惚れてしまっていたかもしれません」

「へ? どうして?」

ツバキの私を見る目がジトツとしてる。どういう意味だろう。

「本当に自覚がないんですね……。まあ、この話題はこれくらいにしておきましょう。それより、今後の方針です」

表情を切り替えて、ツバキが本題に移ろうとする。訊きたい事はあるけど、ここで話を戻すと怒られそうだったから黙る。悪女については後で訊こう。

「この国のエネルギー事情を中心に調べましたが、ゼーナの〈ジェネレーター〉に相当するような施設はありませんでした。しいて言えば、原子力発電施設が原理としては近いようですが、〈ジェネレーター〉の核であるMBコアのエネルギー生成理論とはまったく異質

なものです。(カタストロ)が襲うとは考えにくいですね」

原発が襲われるかもしれないと想像してゾツとしたけど、大丈夫みたい。(カタストロ)が起こす消滅現象は広範囲に及ぶらしいから、放射能がまき散らされたりはしないんだろ
うけど、発電所が稼働しなくなれば大問題に変わりはないから。

「(カタストロ)は(ジェネレーター)以外のものは襲わないの？ すごく攻撃的に見えた
けど……」

「(カタストロ)が(ジェネレーター)以外の施設や生物を襲った例は報告されていません。
邪魔をする(機獣少女)には攻撃してきますが、それは防衛本能でしょう」

地球上にあるもので、(ジェネレーター)に近いものって何だろう？ そもそも、(カタ
ストロ)の目的は(ジェネレーター)に取りついて、核であるMBコアを暴走させ、消滅
現象を起こす事で……。

「——ねえ、(カグツチ)は？」

『ん？ 私がなんだ？』

「だから、(カタストロ)が狙うもの。(ジェネレーター)のMBコアと、MBデバイスの
中のMBコアの欠片かけらって、同じものなんでしょ？」

『確かにそうだが……先ほども言ったように、(カタストロ)が(ジェネレーター)以外を
ピンポイントで狙った事はない。その伝でんで言うなら、MBデバイスを所持した変身前の(機
獣少女)も狙われるはずだ』

「でも、私達が初めて会った時に(カタストロ)は襲ってきたよ？」

『それは、我々が自分を狙っていると(カタストロ)が警戒していたからだろう。近くに
自分を脅かすものがいれば排除しようとする——それこそ防衛本能でな』

私の考えは違ったみたい。だとすれば、他に何があるだろう？

「……いえ、やみひめさんの意見には一理あるかもしれませんが」

私と(カグツチ)の会話を聞いていたツバキが、思案顔で言う。

「(カタストロ)が狙うのは(ジェネレーター)内部のMBコア。ですが、この国——いえ、
この地球上に、MBコアと同質のものは存在しない。であれば、MBコアの欠片を収めた
(カグツチ)を当面の目標としても、おかしくはないでしょう」

ツバキ自身、自分の考えに確信が持てないみたいで、はっきりとは断定しない。

『ふむ、なるほどな。確かに、奴もこの星の知識はあるまい。手負いの状態で闇雲に動き
回るよりは、当面の敵であり、位置を探れる我々を狙ってくるやもしれぬな』

そう言う(カグツチ)の口調には、(カタストロ)に対する煩わづらわしさが感じられた。

「(カタストロ)には、MBコアの場所が判るの？」

『恐らくな。連中は正確に〈ジェネレーター〉を狙って現れる。私とて、ある程度の距離に近づけば〈カタストロ〉の気配のようなものを感じられる』

「つまり、〈カグツチ〉の存在を感知して現れる可能性は充分にあります。欠片かけらとはいえ、MBコアに違いはありませんから」

『ふん。本ジェネレーター命まことがないからと、仕方なく狙われてはたまったものではないがな』

不機嫌さを露あらわにする〈カグツチ〉に、私とツバキは苦笑するしかない。

「それじゃあ、〈カタストロ〉が現れるのを待つしかないのかな？」

「元々、〈機獣少女〉が専守防衛を旨むねとしているのは、こちらから打って出る手段がないからなんです。〈カタストロ〉を感知する術すべもなく、どこから発生しているのかすら判っていませんから」

〈カタストロ〉の事はゼヘナでもほとんど判っていないそうだから、ツバキ達にも情報が少ない。

二人と二基で頭を悩ませていると、ドアをノックする音がした。

「はい」

「そろそろ、ご飯よ。いらっしやい」

ドア越しに聴こえたのは、お母さんの声だ。時計を見れば、結構な時間が過ぎていた。

私は「うん、すぐに行く」と返事をする、お母さんの足音が聞こえなくなるのを待って言った。

「行こう、ツバキ。お腹がすいているから頭が回ってないのかも」

今はこれ以上考えても仕方がないかもしれない。待つしかないなら、ちゃんと食べて、休んで、英気を養うべきだと思う。

「ふふ。そうですね」

ツバキは私の楽観的な言葉に一瞬きよんとしたけど、察してくれたのか、すぐに賛同してくれた。

「——ありがとう、やみひめさん」

ふいに、ツバキが立ち上がるうとした私に向けて、そんな事を言った。

「え………？」

何に対する『ありがとう』なのか判らず、私は間の抜けた反応しか出来なかった。

「やみひめさんに会えなかったら、私は途方に暮れていたか、とつくに〈カタストロ〉と刺し違えていたかもしれません。見ず知らずの私を助けて、居場所をくれて、今もこうし

て気に掛けてくれている」

咄嗟に言葉が出ない。なんて返すのが適切なのか判らない。

「だから——ありがとう」

私をまつすぐ見つめるツバキの表情は、すごく透明で、純粹で、無垢で、健気で——言い表せない愛おしさに声が出なくなる。

でも、何か言わなきゃ。言葉にしないと伝わらないから。

「どういたしました——で、いいのかな。私もツバキに助けられたし、この家は私のものじゃないし、ツバキを気に掛けるのは放っておけない私の勝手だし」

「それでも、私は嬉しいんです。だから、ありがとうと言わせてください」

「そっか……うん、どういたしました」

私が照れ臭くなって笑うと、ツバキもはにかむように微笑んだ。

少し気恥ずかしいけど、心地良い雰囲気。

「あのね、ツバキ。今日、友達と冬服買いに行こうって話になったんだ。ツバキも一緒に行こう？ 今週の日曜にでも。私、話しておくから」

「はい。お邪魔でなければ、是非」

先の事は判らないけど、ツバキにはここにいる間だけでも、楽しい事をいっぱいしてほしい。楽しい事がいっぱいあれば、それだけで生きる理由になる。

護る理由になる。

戦う理由になる。

だから、予定でいっぱいにしよう。

明日も、明後日も、その先も。

死に場所を探す暇なんてないくらいに。

あとがき

どうも、るとおあき流遠亜沙です。

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』第七話をお届け致します。

相変わらずスローテンポというか、1シーンが長いというか……。ただ、キャラクターに感情移入してもらわないと何も面白くない作品なので、そこはご容赦ください。

今回のやみ子とアサトのシーンは少女漫画を意識してみました。いかがだったでしょうか？ どうせなら流行りはやの『壁ドン』もやりたかったのですが、いかんせん、ベンチの背もたれは低いという……残念。

書いていて思うのは、「やみ子みたいな事、自分じゃ思えないけど……」です。彼女の台詞は、はっきり言って理想論です。あんな事を言う奴とは友達になれません。ですが、やみ子は自分の言っている事が理想論だと判っています。その上で、「そうであってほしい」という願いを込めて言っています。

これは、僕も出来ればこうなりたいという理想像です。

良きところで謝辞を。

今回もチェックをくださった紙白さんと、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。ようやく終わりが見えてきました。願わくば、最後まで書き続けられん事を。もちろん、読み続けていただけないと意味がないんですが。創作は人に見てもらって完成だと思っっているので。

では、また次のお話でお会いしましょう。

今回はツバキのロリ巨乳いじりが出来なかったなあ……。

2015 / 3 / 13 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る